天竺樣の挿肘木を用ひた「皷臺」だの、太い虹梁を細い挿肘木の鼻へ一つ斗を置いて夫れでうけて居るのだの、種々の圖がある、此れを見ると「から樣」・「天竺樣」などが鎌倉時代に流行しだしたのは如何にも宋の影響だといふ事が分るのである。

（大正九年二月二十日稿了）

紹介

圖書

滿蒙叢書第二冊

第一冊を繼承して口北三廳志の殘餘を收むると共に、明の金幼孜の著に係り成祖の韃靼征伐に扈從せし時の記錄たる北征錄。並に同じく瓦剌の答里巴、馬哈木等を征伐せし紀行なる征後錄、明の楊榮が成祖に隨ひて阿魯台を討伐せし紀行なる北征記。明の高拱の伏戎紀事、清の高士奇が聖祖に隨行して直隸遵化州へ往來せし始末を錄せし松亭行紀。及同じく扈從して內蒙古へ往來せし紀行なる塞北小鈔。清の張鵬の奉使俄羅斯行程錄。清の錢良の出塞紀略。清の殷化行の典征紀略。清の范昭逵の從西紀略、清の賚堃の奉使三音諾彥記程草、塞上吟、同じく志鋭の張家口至烏里雅蘇臺竹枝詞を收む、本文五百六十六頁、解題は文學博士內藤湖南氏の筆に成り滿蒙研究の史料として廣く江湖に勸むべきものなり。

安龍逸史

扈大均撰

本書は明末の永明王の事蹟に就いて記述せるものにして、王が永曆六年に安隆に駐るや著者扈大均は、番禺卽ち廣東の人にして偶學に在りしより善く當時の事情を知り其の見聞する所を記したり、永明王の事蹟を探むとする者は王船山の永曆實錄と共に是非比較一讀すべきなり。

玉溪生年譜會箋

張采田編

本書は史徵の著者張采田が唐の詩人李義山の爲に編せし年譜なり博引旁證、能く其の元和七年初歲より大中十二年四十七歲に至る間の事蹟を論證したれば李義山の生涯を知らむと欲する者には忘るべからざる善本と謂ふべし。

專誌徵存

羅振玉校錄

本書は漢、魏、晉、夏、北魏、東魏、齊、周、隋、唐、宋、時代の古甎八十一面に就て一一其の寸尺を測り並に其の銘文を精讀記載したるものなり。

楚州城甎錄

羅振玉撰

楚洲、淮安州、武鋒軍、鎭江軍、淮東轉運司、建康都統司等の甎文を收む

恒農專錄

羅振玉校錄

本書は主として故端方氏所藏の古甎拓本を以て編輯せし甎錄に

して元和殘專、象錯專以下二百三十余面の殘專銘文を錄す。

●地券徵存

羅振玉校寫

上は漢より下は元、明、高麗に亘る地券の文を收錄したるものにして支那古文書學上稀有の史料たるを失はず、今其の目を列擧せば漢は建初買地券、孫成買地券、房桃枝買地券　吳は浩宗買地券、晉は楊紹買地朔、朱曼妻薛買地券、魏は張殊洛買墓田券、唐は喬進臣買地牒、劉元簡買地券、南漢は馬氏買地券、宋は馬隱賣地券、朱近買地券、金は趙通買地券、元は有□□買地券、明は李□□買地券、殘買地券、邱斗金等買地券、殘地券、高麗は僧世賢買地券あり。〔以上那波〕

●古鏡の研究

富岡謙藏遺著

故富岡謙藏氏の晩年最も力を致されたる支那古鏡に關する論文を集めたるものなり。菊版本文四百十六頁、圖版九十六枚より成り、全文すべて十四編を收む。內「鑑鏡の起源」「日本出土の支那古鏡」「支那古鏡圖說」「支那漢六朝年號鏡考」「王莽時代の古鏡考」「銅鉾銅劍伴出の古鏡の年代」等の七編は嘗て本誌を初め藝文、國華、考古學雜誌等に掲載せられしものに係るも、他の七編は未定稿の類にして著者の最後に抱懷せる研究を載せるものなり。先づ其の「畫象鏡考」は此の特殊の圖樣に現はるゝ西王母東王父の說話の影響を辿りて、時代の考察と其の製作地の北支那なるべきを論じ、「蟠螭鏡考」に於いては、文樣の周秦等の古銅器に類似せるを指摘して支那鏡最古の型式を推考せり。「支那古鏡圖說」（補遺）は細線式獸帶鏡、內行花紋鏡、繪模樣神獸鏡等に就いての新見解を錄し、終に著者の到達せる漢六朝代の古鏡鑑變遷の一斑を概括せるもの、「再び日本出土の支那古鏡に就いて」は續て本誌（一ノ四）に發表せる稿をつき、同式鏡の集成を試み、其の年代を考定して遺物の分布と對照し、これより我が國文化の萌芽の狀態を究めて、遺物上より日本建國の年代を考へ、魏志に見ゆたる卑彌呼の何人なるやの問題に及び、又た本邦古墳墓年代研究の方法を說けり。「本邦仿製古鏡に就いて」は多くの遺品よりこれを類別して同じく我が古代文化の性質を論ぜるものなり。圖版は本文の順に依り新に作製せられしものにして、印刷鮮明、本文と對照して好資料と云ふべく、其の日本出土古鏡の集成圖の如きは本邦に於ける新しき試みとして研究上永く參考すべきものならむ。別に卷頭に內藤、喜田、濱田三博士の序文ありて、故人の業績を傳へ、其の研究方針を說き、卷末には梅原末治の「富岡先生の古鏡の研究に就いて」なる一文を附して、富岡氏の鏡鑑研究の由來を記せり。

（定價八・〇〇、丸善株式會社）

●古墳發見石製模造器具の研究

高橋健自著

今回新に發刊せる帝室博物館學報の第一册にして、主として同館所藏の石製模造品に就いて著者の綜括的研究を錄せるものなり四六倍版、本文六十頁、圖版二十四枚より成り、初に此の種遺品の研究上に於ける興味を指摘して、これを（一）武器及び武具（二）服飾具（三）農工具（四）厨膳具（五）機織具の五者に大別し、更にこれを二十七種に細分して一々圖に依りて其の形狀性質を記し、次に從來著者の注意に上れる此の種遺品の分布を錄して、畿內と關